歷程

歌集

歴程

江苏工业学院图书馆
藏书章

武井忠夫

著者略歴

武井　忠夫
昭和２年１月19日　甲府市に生まれる。
昭和19年３月　山梨県立甲府中学校卒業
昭和23年３月　北海道大学　予科卒業
昭和27年３月　〃　医学部卒業
昭和28年３月　国立相模原病院インターン修了
同年　６月　〃　小児科研究医員
昭和32年３月　〃　小児科医局員
同年　３月　学位受領
昭和42年４月　国立相模原病院検査科医長
昭和44年４月　武井小児科医院開業

平成10年１月　歌集「揺曳」発行

住 所　〒228-0814 神奈川県相模原市南台5-15-6
電 話　042-744-1018

歴　程（れきてい）―辿り来し道の辺のうた―

平成11年１月19日発行
著　者　武井　忠夫
編　集　太陽学院出版
〒240-0065横浜市保土ヶ谷区和田1-20-20
印　刷　サン・プリンティング・システム
製　本　田島製本所

ISBN4-925033-11-5

序文

布施徳郎

このたび、畏友武井さんが歌集「歴程」を上梓されました。氏の歌につきましては、さきの歌集「揺曳」巻頭の西郊文夫氏の適切な序文に盡くされていますので、今さら付け加えることもないのですが、折角の機会でありますので、私なりに感じたところを記してみたいと思います。

武井さんの歌を拝見して、まず感ずるのは詩情の豊かさ、自然観照の細やかさであり、また季節の移ろいを見る目の確かさです。そして平穏な日常のなかから、つぎつぎに歌を紡ぎ出すということは、作者が己の暮らしを深く見詰めていてこそ、できることなのです。

同時にもう一つ気づくのは文語表現の美しいしらべです。したがって耳に快い。詩情とリズム、この二つを兼ねた武井さんの歌は、おのずから人の心に訴えかけるものがあります。

霜柱なお著るけれど生け垣の角ぐむモチの紅深(べに)みけり（一月）

山の際(ま)の夕陽を浴みて咲きゆらぐ木の間(ま)あまねしカタクリの花（三月）

窓の辺の黄の嵯峨菊の花むらに深める秋の陽の柔らかき（十月）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

そしてまた、ご自宅の周辺で朝な夕な仰ぎみる大山も作者の詩心をそそる恰好の題材となって、情感ゆたかに読者の前に展開しています。

月冴えて夜目にも著(しる)く大山の顕(あら)わる方や澄める明星（一月）

大山の斑(はだ)らの雪の紫に霞める朝の陽の柔らかき（三月）

丹沢の山脈(やまなみ)蒼く宙天を茜に染めし夕焼けの刻(とき)

作者が自然から目を家庭にうつすとき、父、夫、そして孫に目の無いお祖父ちゃんとしての歌が生まれ、愛情に満ちたご家庭が偲ばれます。

遠き日の子の入学の道すがら仰げるコブシまた咲き初めぬ（三月）

子を育て了りぬ妻と二人して犬を曳きつつ夜の路行く（十月）

人ごとに又呼びかけて初めての孫の賀状を示す妻はも

さて作者は医学を遠く北海道大学に学ばれました。それは昭和二十年代という、まだ日本の国も民も貧しい時代ではありましたが、多感な青春を送られた北の国は、折りに

ふれて蘇ってくる心の故郷となっているのに違いありません。

北のかの街し想ほゆアカシヤの花房白く陽に映ゆる朝（五月）

四十五年の隔たり超えて肩抱きひたぶるに歌う〝都ぞ弥生〟

（北大卒後四十五周年記念会）

黄レンジャクの群れ鳴き交わし朱き実の雪面（ゆきも）染むとふ北の文読む（十一月）

最後になりましたが、武井さんの歌を語るとき、忘れられないのは旅行詠でありましょう。歌集「揺曳」のあとがきで作者が語られておりますように、昭和六十二年のオランダの旅で詠まれた青空に舞う風車の歌が、この道に進まれるきっかけでした。

多年の関節症を克服された作者は、今は健康に恵まれ、精力的に毎年、国内、国外の旅を楽しまれているようです。そのさい、耳目に触れた異国の風物の数々が印象的な作品として残されています。

二頭馬車と電車の通い八月にコート姿の行き交える街

（オーストラリア寸描　メルボルン）

天霧う嶺々続き見はるかすヒースの花の咲き初めし谷
（スコットランド・イングランド紀行　グレン・コー）

刻告ぐる鐘また鳴り出でてカペル橋に灯の連なりて耀いにけり
（スイス紀行　ルツェルン）

モスクより礼拝の刻告げ知らすコーラン流るる赤屋根の街（トルコ紀行　アンカラ）

今し仰ぐアフリカの果て喜望峰のきりぎし粗く蒼海に立つ
（南アフリカ紀行　ケープポイント）

ただに広き王宮跡に栄枯秘めレンガ崩れてパゴダ群れ立つ
（タイ紀行　アユタヤ遺跡）

なお、国内の旅の歌も数多く載せられています。

紅と黄の彩りのいや深く柔ら陽に透く東福寺庭　（十一月　京都）

唇に朱のかそけく残りあえかなる天女のおはす秋篠の寺（十一月　大和路秋色）

白き山を望める街に茜さし〃夕焼けこやけ〃のチャイム流れぬ（五月　高山）

落つる陽に茜と燃えぬ鳥渡る本部の海の夕焼けの彩　（五月　沖縄）

武井さんのお生まれは昭和二年一月の卯年。私はそれより一年早い大正十五年一月の虎年で、ほとんど同時代を生きてきました。それゆえ、通読して共感を覚える歌が多くありました。優れた感性の持ち主である氏は、今やわが神医歌壇に欠くことのできないメンバーの一人となられています。

終わりにのぞみ、武井さんのご健康とますますのご研鑽を期待してペンを擱きます。

平成十年十一月　川崎市にて

（神医歌壇選者）

目次

序文　布施徳郎　2

平成六年（一九九四）

新しき歳　12
待春　13
犬と共に　15
春たけて　16
相模原公園にて　17
五月の朝　19
梅雨明け近く　20
七夕飾り　21
母一周忌　23
股関節術後一年　25
オーストラリア寸描　27
秋意　36
上野にて　37

北の街 39
秋の陽 41
茜　空 43
ビワの花むら 45

平成七年（一九九五）
新しき家 48
春の息吹き 53
アカシアの花 56
ほたる火浄く 58
母三回忌 59
スコットランド・イングランド紀行 61
旧き縁 77
幼らの電話 79
研二結婚 81
北国の文 86

平成八年（一九九六）
大山二題 90

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

春の訪れ 91
カタクリの里 93
紅の彩 94
結婚四十周年 95
懐旧の刻 96
朧月夜の蛍 98
トルコ紀行 100
京都行 114

平成九年（一九九七）
古稀迎う 118
春うらら 121
塩田先生逝く 125
沖縄紀行 130
北大卒後四十五周年記念会 143
大谷先生を悼む 151
南アフリカ紀行 154
大和路秋色 165

平成十年（一九九八）
タイ紀行
雪晴れて
「揺曳」発行
長野オリンピック
松本サリン事件裁判
早　春
孫ら初旅
高山行
北の香り
ミミ追想
スイス紀行
犬逝きし後
紅葉耀う
あとがき
174 184 185 186 188 190 191 193 200 202 212 228 230

平成六年（一九九四）

新しき歳

（一月）

犬曳きて朝な付き来し孫ら去り新しき歳の業（わざ）に対うも

診療所の新築を機に待合室にＢＧＭを流す

児らを診つつ心和むも宗次郎のオカリナに聴く懐かしき唄

童唄(わらべ)に合わせて踊る子らもあり待合室のつれづれの間を

待春

（二～三月）

軒の端(は)の枝垂れの梅の紅(くれない)の蕾ふくらかに花よりも濃く

しだれ梅にふふめる蕾ふくよかに今朝の温みに紅を増す

風寒き弥生の入りの陽だまりのサンガイグサの紅の花

草たけはなお伸びやらで朝な行く道に咲き初むムラサキハナナ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.